

然れども既往を論ずるも、事に益なし。請ふ先づ予の首を刎ね、之を實效として、貴藩社稷の安泰を計り、列藩に反抗せざるの計をなせと、多々部曰く、今日は敵なれども、昨は盟主として恩を受く、如何ぞ刃を擬すべき。公等速に去れ、我も亦去らんと。此時砲聲三發、早く已に仙臺、相馬の開戦せしを知る。兩人即ち去る。此の如くして仙臺、相馬兩藩は、分離を告げた。

此日拂曉、仙臺藩は安田竹之輔を先鋒とし、亘理勢及び遠藤主税の隊を以て、本道を進み、鈴木彌左衛門、青木忠五郎等は、右側間道より進み、相馬軍及び西軍と戦ふ。西軍の大衆全力を盡し來れる爲め、本道口の仙臺兵披靡す。鈴木、青木の隊之を開き、本道口の軍に大壺に合して奮戦す。此時遠藤主税の兵は、黒木、大壺間に於て、西軍の圍む所となりしかば、鈴木の隊奮進して之を援け、西軍を撃退し、兵を收めて、國境駒ヶ峰に退ぞく。

尙ほ「會津戊辰戦史」には、相馬藩の爲めに、左の如く解説してゐる。

八月六日相馬藩同盟に背き、西軍に降る。是より先き、仙臺、米澤の兵及び徳川氏の兵、相馬藩を援けて、西軍を防ぐや、藩主相馬本胤主依頼甚だ篤かりしが、平城

陥るの後、西軍次第に來り迫る。已にして仙臺、米兵を班へして國に歸り、各國疆を防禦せんとす。本胤主切に止りて援けんことを乞ふも、仙臺、米の兵肯せず。是に於て相馬藩孤立し、加ふるに兵寡くして西軍に抗すること能はず。故に降意なし。と雖も、已むを得ず遂に降を乞ふと云ふ。後徳川氏の臣某、相馬に至りて、西軍に降るを詰りしに、彼等陽はに涕泣して、其の情狀を談じ、仙臺、米澤の援けざるを怨望せりと云ふ。

相馬の降伏は、攻守同盟の精神に背きて、各藩兵を班へし、相馬をして孤立せしめたるに起因す。嚴密に武士道の見地より論ずれば、赦し難き感あるも、人情より論ずれば、深く咎む可からざるに似たり。三春の例を以て論ずべきにあらず。此れも一種の見解だ。要するに其の理由は何れにもせよ、相馬藩は今や奥羽聯盟

【100】 奥羽、越聯盟の壊崩

米澤仙臺  
皆因循

奥羽越聯盟の端を白石會議に發するや、東北各藩何れも一致協賛進んで關東を略し、更らに江戸城に據り、西南薩長に反對の各藩と相ひ呼應し、以て天下の大勢を制せんとの意氣込であつた。然も其の盟主たる可き仙臺藩は、其の活動甚だ遲鈍にして、動もすれば藩内の異論に煩はされ、且つ門閥格式に拘泥し、太平因循の風習に執着し、事毎に機宜を失するの憾多かつた。米澤藩も亦た殆んど同様にして、但だ其力の仙臺藩に比して寡少であるだけの相違のみであつた。

皆自ら守  
るに急

奥羽越聯盟の中に於て、眞に善戦したるものは、會津、庄内及び越後長岡藩の三者に過ぎなかつた。庄内は四邊に敵を受け、長岡も亦た官軍の來攻に對し、苦戦最中に、固より他を顧みるに遑あらず。但だ會津のみは白河口にも、越後方面にも、それぞれ進出して、其の兵力の侮るべからざるを示したが、それでも何より大切なるは、一藩四境の防禦であつたから、其力を逞うする能はず。然も會津、庄内如何に其の兵力雄精なりと稱するも、仙臺、米澤を排して、自から盟主の地歩を占む可きにあらず。此の如くして、福島に於ける仙臺の軍事局も、白石に於ける聯盟の公議府も、寧ろ却て小田原評定にて日を暮らすの他は無かつた。此の如くして、折角天

官軍の威  
風

下に奥羽越の大聯盟を名乗り上げつゝ、其實は何等、果敢果敢しき大運動を倣して、天下の耳目を聳動せしむる事は出来なかつた。

官軍側に於ても、九條、澤、醍醐三卿が、大山格之助、世良修藏兩參謀と共に、孤兵を提げて、松島灣に乗り込み來りたるは、拙策であり、爾後の措置も、亦た徒らに東北各藩の惡感情を挑發して、反抗の精神を煽揚したるに過ぎなかつた。ことは、掩ふ可からざる事實であつたが、然も白河口には、官軍側に取りては無二の精略家である。薩藩の伊地知正治、土藩の板垣退助が相ひ接して到着し、加ふるに平潟口の海軍が海道筋より進み來つた。斯くて白河城は、幾回か東軍が之を恢復す可く、襲撃し來るも、毎度逆撃し、回は一回よりも打撃を加へ、而して棚倉を取り、三春を降し、遂ひに二本松を陥れ、海道筋にては、泉、湯長谷を取り、遂ひに平城を陥れ、相馬藩を降らしめ、官軍の威風は、今や白河關の内外を披靡するの勢ひがあつた。

東軍面目  
保持難

而して此の方面に於て、東軍中居然其の面目を保持するものは、只だ會津、仙臺、米澤あるのみだ。而して秋田は既に仙臺の使者を斬りて、其の官軍に屬する態度を明白にし、弘前も亦た聯盟を脱退し、而して北越方面に於ても、新發田は反盟、長岡

は敗れ、此の方面に戦うたる各藩の兵も亦た、會津に向けて引き揚ぐるの已むなき情勢に立ち至つた。

中心勢力の乏失

各内訌

會て九條與羽鎮撫總督を擁して、聯盟の旗幟を鮮明ならしめんと企てたが、空しく肥前藩士前山清一郎の爲めに謀られ、九條總督を取り逃し、その代りとして輪王寺宮を擁するを得て、宮を白石に奉迎し、聯盟の望を此れに繫いだすが、如何に輪王寺宮の令旨が下ればとて、錦旗に抗す可くもなく、正直に云へば、輪王寺宮の存在も、期待したる程の效能は見出されなかつた。而も順境に際しては、人心期せずして相ひ融和するも、逆境に處しては、銘々不平あり、煩悶あり、懊惱あり、憤慨あり、愾鬱あり、その爲めに却て内相ひ闘ぐの醜態を演出するの虞なしとせず。此の如くして大にしては各藩相互の間に於て、小にしては藩内に於て、兎角反目軋轢を來たし、その爲めに愈よ協同作用が全く不可能と云はざるまでも、圓滑を缺き、迅速を缺き、徹底を缺くの已む可からざるは、必然でない迄も蓋然の勢ひであつた。要するに、機構には不足は無いが、それを運用する人物に不足があつた。然も如何なる人物あるも、大勢には抗し難きものがある。日本の統一は、大勢である。それに

大勢に抗し難し

反抗したる奥羽、越聯盟は、到底成立の見込のある可き理由が無かつた。されば奥羽、越聯盟の失敗を見て、徒らに人物無きが爲めとのみ云ふは、未だ平允の論とは云ふ可きものではあるまいと信ずる。

昭和十三年四月十二日午前七時半。

時に昨雨新たに霽れて、窓外の大島櫻満開。

蘇峰七十六叟

其一年表

明治元 戊辰年 西曆一八六八年  
支那同治七年

正月十二日。會津磐坂大阪より江戸に還る。(二二)

二月十三日。會津藩神保修理に死を賜ふ。(三三)▲十六日。  
會津藩王松平容保江戸發、歸國。(二二)

閏四月二十日。會津兵白河城占領。(四)▲二十三日。東北

列藩重臣白石會盟。(四)▲桂太郎新莊に在り、今日

の頃白河方面の敵情を探らんとして新莊發。(二四)

▲二十四日。官軍蘆野に來り、白河を狙ふ。(四、五)

▲二十五日。官軍白坂關門を攻む。敗れて蘆野に退

く。(四、五)▲桂太郎泰山に吉田大八を訪ふ。(二四)

▲二十六日。會津兵白河附近の防備を堅む。(六)▲

二十七日。前山清一郎佐賀小倉の兵を率ゐる横濱發、  
仙臺に向ふ。(一七)▲二十八日。仙臺兵、朝倉兵來

年表

りて白河に會津兵と合す。(六)▲官軍増援兵を得て

今日白坂に集結す。(七)▲二十九日。在白河東軍、

西軍襲來の報を聞き防備を手配す。(六)▲官軍白坂

に於て白河城攻撃軍略を決す。(七)▲前山等仙臺領

東名濱に著す。(一七)▲澤爲量新莊を發す。(二五)

五月一日。官軍白河城を取る。(八、九、一〇)▲澤爲量

秋田領内境に入る。(二五、二六)▲秋田藩助場奉

行根本周助澤に謁し秋田入を促がす。(二六)▲二日。

仙臺藩増田歴治等白河の敗報を聞き、福島を發し、

二本松に至り、敗兵を糾合し、會津、二本松兵を合

せて須賀川に至る。(一一)▲前山清一郎等仙臺に入

り、九條總督に謁す。(一八)▲此の日清一郎また但

木土佐と會見す。(一九)▲三日。奥羽二十五藩連盟

成立。(二二)▲澤副總督一行湯澤に入る。秋田藩使

者來りて秋田入を乞ふ。(二六)▲四日。東北各藩軍

議を議らし、白河の周圍に軍を配置す。(一一)▲清

一郎東名に來り、兵を率ゐて松島に至る。(一九)▲五日。仙臺藩英力須賀川に來り、諸隊長を激勵す。(二〇)▲六日。澤爲量湯澤發秋田に向ふ。(二六)▲八日。仙臺藩主親書を發し奥羽越公議所設置の旨義を明かにす。(二二)▲前山藩一郎松島を發す。(一九)▲九日。清一郎鹽釜宿營。(一九)▲澤副總督秋田に入り、直ちに土崎に赴く。(二六)▲十日。佐賀小倉兩藩兵入仙。仙臺藩藩中に布告を發す。(一九)▲澤副總督土崎發、五城目附近宿營。(二六)▲十一日。澤副總督森岡著。是より滯留三日。(二六)▲十三日。今日或は明日九條總督醍醐參謀實賢堂に臨み兵士の操練を見る。(二〇、二一)▲十四日。佐賀、小倉藩士伊達慶邦に面會。(二二)▲澤副總督森岡發、弘前に向ふ。(二六)▲十五日。來る十八日九條總督仙臺發、奥地巡撫に就き、仙臺藩その供來員を命ず。(二二)▲賴王寺宮上野を用て尾久農家に泊す。(五〇)▲十六日。九條、醍醐兩御寮城、伊達慶邦に暇乞をなす。(二一)▲澤副總督森岡より大館に著。(二七)▲賴王寺宮淺草車光院に入る。(五〇)▲十七日。伊達慶邦、九條醍醐二郡訪問、暇乞。(二一)▲仙臺の士細谷十太夫須賀川にて兵を募り一隊を編し、新隊隊といふ。

(三七)▲賴王寺宮河川市谷白龍院に移る。(五一)▲十八日。九條醍醐二郡仙臺發。(二一、二七)▲二郡富谷の會所一泊。(二三)▲十九日。九條醍醐二郡古川に宿營。(二三)▲賴王寺宮竹林坊光院に暇を賜ふ。(五一)▲二十日。九條、醍醐二郡古川宿在。(二三)▲岩倉具定同具經を奥羽征討白河口正副總督となす。(六一)▲二十一日。九條、醍醐兩郡古川發、築館宿營。(二三)▲新隊隊小田川附近にて官軍と戦ふ。(三七)▲賴王寺宮從僧亮榮尾州藩士水田新次郎に萬一の場合宮を尾州戸山屋敷に移さんことを求む。新次郎了諾。然れども亮榮は遂に宮を奥羽に退かしめんとし、榎本和泉守に依頼し、その了諾を得。(五一)▲二十二日。九條醍醐二郡金成宿營。(二三)▲仙臺大松澤掃部之輔等兵を率ゐて須賀川著。(三八)▲江戸醫師西川支仲賴王寺宮脱出扮裝の依頼を受く。(五二)▲二十三日。九條醍醐二郡一の關本陣著。(二三)▲仙臺大隊長柴川播磨等兵を率ゐて新庄金山に出發し、米澤、山形、上ノ山各藩と其勢を合す。(三〇)▲二十四日。九條醍醐二郡水澤に宿營。明、明後兩日滯留。(二三)▲二十五日。細谷十太夫軍議の爲矢吹本陣に至る。偶々敵軍襲來の報あり、即ち引返して

六月

太田川に官軍と戦ふ。(三八)▲賴王寺宮軍總長頼光季込、即夜羽田津發。(五二)▲二十六日。東軍白河に官軍を攻め反撃せらる。(四一)▲仙臺の進軍嚮使者今日發足。(四四)▲二十日。九條醍醐二郡南郡領に入る。(二三)▲澤副總督大館發、能代に著。(二七)▲この夜總督府使者能代に來り、大山參謀等と會見す。(二九)▲東軍また白河城を攻む。拔く能はず。(四一)▲二十八日。賴王寺宮常陸平湯著、磐城國甘藷寺村慈眼院に入る。(五二)▲二十九日。賴王寺宮平著。(五三)▲薩藩兵江戸發、白河救援に赴く。(六一)▲三十日。東北列藩使者仙臺松の井邸に會談。外國との交際問題を議す。(四三)▲賴王寺宮岩代西白河郡中寺に著。(五三)

論す。(三〇)▲奥羽征討白河口總督岩倉具定を驅め、鷲尾隆榮をして代らしむ。(六一)▲九日。薩藩増援部隊白河著。(六一)▲十日。仙臺使者新湯著。(四四)▲正親町公儀を奥羽進討總督とし、鷲尾隆榮を改めて大將督參謀奥羽進討白河口出發となす。(六一)▲十二日。東軍また白河を攻む。また目的を果さず。(四二)▲明會、二本松、平、中村、三春等諸藩抗敵の間あり、榎倉阿部氏の京邸を没し、家臣の入京を止め、丹羽長國以下家來の邸外に出づるを禁す。(六一)▲十五日。磐城泉城主本多氏使を矢吹の仙臺陣營に遣はし海岸防禦の援を求む。(六一)▲十六日。西軍平湯に上陣。(六一)▲十七日。仙臺、泉及び舊幕軍遊撃隊、上總藩西林氏等の兵官軍と勿來附近に戦ふ。(六二)▲十八日。賴王寺宮若松發。米澤に向ふ。今夜大陣泊(五五)▲賴王寺宮使者仙臺に入り、九條總督留置きを計りしが、總督すでに去りてあらず。(五六)▲東西兩軍仁井田邊に戦ふ。(六二)▲十九日。賴王寺宮、澤副總督、四本一泊。(五)▲二十日。賴王寺宮米澤著。(五五)▲二十一日。賴王寺宮仙臺に入らんとす。仙臺藩主伊達氏即ち直書を對内に布告し、藩士の努力を要む。(五六)▲二十二日。仙臺藩

留中の輪王寺宮使者歸途につく。(五七)▲二十三日、仙臺授兵平に来る。(六二)▲板垣退助等國會城攻略の議を立つ。(六三)▲仙臺將論動搖。今日矢吹陣營の將士會議。退却の議を決す。(六九)▲二十四日、九條總督一行秋田領生保内に至る。(三二)▲東西兩軍植田に戦ふ。(六二)▲官軍棚倉城を取る。(六四)▲二十六日、仙臺兵の一隊白河城を恢復せんとし、矢吹に至る。(七一)▲二十七日、輪王寺宮米澤發。新宿著。(五五)▲二十八日、桂太郎の命を帯び越後に使したる龍王丸船頭彈正、軍資金を携へ還る。(三二)▲輪王寺宮新宿發關宿一泊。(五五)▲官軍泉を取る。(六六)▲二十九日、輪王寺宮白石著。(五六)▲官軍湯長谷を取る。(六六)▲仙臺以下の東軍白河の西郊矢吹に至る。(七一)

七月

七月一日、九條總督一行及び澤田總督一行秋田に入る。(三二)▲此の日仙臺使節志茂又左衛門等秋田に入る。(三四)▲輪王寺宮岩沼著。(五六)▲官軍平を攻む。目的を果さず。(六八)▲東軍白河を攻む。克たず。(七二)▲今日仙臺城中軍議。坂英力を名代とし、白河に向はしむ。(七三)▲二日、九條、澤田總督相議し、秋田藩使節明徳館を總督府とし、庄内征討の軍

を總裁す。この日佐賀兵百餘名土崎に上陸し秋田に入る。(三二)▲輪王寺宮仙臺に入る。(五六)▲三日、秋田藩直役會議。藩圖一定す。(三三)▲仙臺坂英力等出軍。(七三)▲四日、この夜仙臺使者志茂又左衛門等秋田にて殺さる。(三六)▲五日、秋田藩仙臺使節の首を揚す。(三六)▲今日より九日まで輪王寺宮聖上萬歲戰亂平定の爲修法。(五六、五七)▲六日、仙臺使者志茂丁吉等秋田に入る。また斬らる。(三六)▲守山三春官軍に歸順申出。(七五)▲七日、仙臺の土橋尾東作等、外國使節に授くる書を持し英國軍艦に乗し新潟發横濱に向ふ。(四四)▲十日、新潟に於ける各藩使者、外國貿易に關し總督を説かんとし、白石軍務所に稟議する爲、仙臺の土蔵名親負等を白石に遣す。(四四)▲輪王寺宮仙臺入城。この日令旨を賜はる。(五七)▲ついで奥羽越公議府は輪王寺宮御動坐布告文を發す。(五八)▲仙臺坂英力等の兵須賀川に入る。(七三)▲十一日、須賀川に於て白河襲撃軍議。(七三)▲大山巖小名濱に來り、平攻撃軍を指揮す。(七六)▲十二日、輪王寺宮仙臺發白石に向ふ。今夜岩沼泊。(六〇)▲官軍小名濱發。平攻撃に向ふ。(七六)▲十三日、輪王寺宮白石に入る。

臺兵米澤を経て國に歸らんとし、石庭口に至り會津兵に一泊を求む(九七)

〔六〇〕▲この頃葦名親負等白石著、輪王寺宮法親王に使命を具狀す。宮板倉伊賀守を總裁に任ず。(四四)▲官軍平を取る。(七六)▲十四日、奥羽越列藩今日附を以て、米公使法兒健に一書を送り、其主旨を天聽に達せんことを要む。(四六)▲仙臺兵白河近郊根田に至る。(七四)▲十五日、弘前藩聯軍離脱を仙臺に告ぐ。(七〇)▲東軍白河城攻撃また失敗。(七四)▲十六日、仙臺兵棚倉城恢復を企つ。三春兵離反の爲果さず。(七五)▲十七日、三春藩福島軍務局に救援を依頼す。(七五)▲板垣退助棚倉より白河に赴き伊地知と三春進撃を議す。(七九)▲二十四日、官軍棚倉發、三春に向ひ、今夜石川泊。(七九)▲二十五日、三春攻撃軍蓬田泊。(七九)▲二十六日、三春藩官軍を引入る。(七五)▲官軍蓬田發、三春に迫り之を抜く。(八一)▲二十七日、官軍三春城追手門に會し、敗賊を討つ。この日通んで本宮を取る。(八一)▲官軍また二本松領糠澤を襲ふ。(八四)▲二十八日、葦名親負等板倉伊賀守等と共に、越後津川に至り、新潟に於ける東軍の敗北を開き引還す。(四四)▲仙會兵本宮を恢復せんとして能はず。(八三)▲二十九日、官軍二本松を取る。(八七、八八、八九)▲仙

其二 人物概覽

【ア行】

ア

青山助之丞

二本松藩士。名は正誠。助左衛門正道の次子。元治元年十七歳にして水戸の役に従ひ、慶應三年白河城守衛に列せらる。戊辰の役小野新町に出陣し、退いて二本松城下大壇口を守る。七月廿九日西軍來り迫るや、山岡榮治と共に群がる敵中に驅け入り、縱横奮撃敵數人を仆し、力盡きて死す。時に年二十一。野津道貫その陣中であり、深くその勇氣を賞し、明治三十三年、爲に二勇士戰死之處の碑の額に顯すといふ。(八八)

秋田映季

秋田萬之助に同じ。一〇掲出。(六一)

秋田肥季

磐城三春藩主。萬之助と稱す。また邦季、嘉季とも名のる。天保三年三月家を承く。信濃守また安房守と稱す。慶應元年五月死。映季嗣ぐ。(五三)

葦名頼負

一〇掲出。(四四)

荒井郁之助

九掲出。(一五)

荒川秀種

秋田藩士。文政十年生る。初名久太郎。戊辰の際、大番頭格にて砲術所準砲隊隊長となる。毎戰勝利を得、人呼んで夜叉荒川といふに至る。明治四年擢少參謀、のち權大講義となる。古四王神社、土崎神社等の祠官を勤む。明治十五年死。年五十六。(二六)

阿部正靜

阿部美作守に同じ。一〇掲出。(五三、五四、六一)

阿部美濃守

美作守と稱す。正靜に同じ。(四二)

安部井又之丞

二本松藩士。名は良明。小澤長右衛門の弟。割奉行、勘定奉行より御勝手方勘定奉行となる。善性剛直、文武の才あり。戊辰七月廿九日城山に自殺す。年六十五。長子磐根世に其名を知らる。(八九)

安藤信勇

安藤理三郎に同じ。七、八掲出。(五三、六一)

安藤信正

安藤對馬守に同じ。二掲出。(五三)

イ、中

井口 紘

秋田藩士、正兵衛の二男。始め藩校明徳館に學ぶ。後平田城隍の門に入る。元治元年藩主に

從ひ上京中勳皇意見を建白して佐幕派に忌まれ、歸藩。ついで小野時通亮等と雷風義塾を創立す。慶應中京師警衛を勤む。明治元年四月砲術師役總督廳接保となり、次いで各地に職ひ功あり。後周防方として西京詰を命ぜらる。明治二年藩校教授となり、三年秋田藩權大屬神祇方に擢動し、以來大教正に補せらる。三十年一月東京に死す。年六十四。(二六)

石母田但馬

一〇掲出。(一九、五六、九八)

板垣退助

一、三、四、六、七、九掲出。(六三、六四、七六、八〇、八一、八二、一〇〇)

板倉勝靜

一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇掲出。(五三、五四)

板倉勝尙

板倉甲斐守と同じ。一〇掲出。(五三)

伊地知正治

二、四、五、六、七掲出。(五、七、八二、一〇〇)

岩倉具定

四、六、七、九掲出。(六一)

岩倉具經

岩倉八千九に同じ。六、七、九掲出。(六一)

岩倉具視

一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇掲出。(四八)

伊庭八郎

名は秀頼、舊幕府講武所劍術師範役伊庭軍兵衛の子。天保十四年生る。文武に通ず。長じて

ウ

氏家兵庫

仙臺藩士。名は厚時、後牛人と稱す。(七五)

上杉勝道

上杉駿河守に同じ。一〇掲出。(五五)

上杉熊松

齊憲の子。茂憲の弟、安政二年五月生る。(五五)

上杉篤之助

齊憲六男。名は忠敬。安政二年七月生る。後武藏忍藩松平忠誠の嗣となる。大正八年十一月死。(五五)

上杉齊憲

一〇掲出。(五三、五四)

上杉茂憲

齊憲の子、米澤藩主。弘化元年二月生る。幼字龍千代、また喜平次。始めの名は章憲、ついで喜平次と改め、萬延元年十二月今の名に改む。明治

元年十二月家を承く。大正八年四月死。(五四)  
上田八郎右衛門 會津藩士。伊閑の子。八百石を食む。(一一、三八、四二)

五、五

江藤新平 八、九掲出。(六四)  
榎本和泉守 六、七、九掲出。(一五、一六、五一、五二)

江幡五郎 一〇掲出。(二七、二八)

遠藤主税 一〇掲出。(一〇〇)

遠藤文七郎 一〇掲出。(六九)

オ、ヲ

小笠原謙吉 土佐藩士、名は茂連、唯八の弟。槍術に長ず。戊辰の役板垣退助の軍に従ひ、三番隊長となり、甲府及び若松等に戦ひ、八月二十三日若松城門に通り、飛弾に中りて死す。墓は若松融通寺にあり。(八四)

(八四)

小笠原唯八 九掲出。(六四)

小笠原長行 小笠原壹岐守に同じ。一、二、四、五、七掲出。(五三、五四)

小野崎通亮 秋田藩士、通孝の子。通稱鐵藏。幼より國漢の學を好む。文久三年同志と謀り雷風義塾を創め、子弟を教育す。明治元年明徳館教授となり、砲術所頭取見習を兼ね。藩内軍備の整理に功あり。戊辰の役主として勳皇の論を唱へ参謀となり、各地に戦ひ功あり。職後神祇官となり、京都にあり、秋田藩大参事に轉ず。後古四王神社宮司となる。三十年貴族院議員に勅選せらる。三十六年七月死。年七十一。(二六、三三)

小野寺元通 仙臺藩醫。寛政十二年、陸中國西醫井部山目村に生る。名は將顯、字は區一郎、通稱主一郎。始め大槻平泉に學び、後長崎に赴き、シーボルトに従ひ蘭語の傍ら露西亞語を習ふ。後江戸に歸り幕府の書取調所に出仕し、ついで仙臺藩醫となり、醫術學頭となり、府學蘭學局總裁を兼ね。その間種痘術の普及に努め、また藩命を受けて地理書新譯牛奄部伊斯を譯述して北邊の警備に便せり。明治九年一月死。年七十七。(四七)

大石彌太郎 土佐香美郡野市村の人。文政十二年生る。初名元敬後圓と改む。文久中洋學研究の藩命を受け、勝安房の塾に入る。武市瑞山と志を一にし、江戸

文彦はその字なり。江戸に生る。壯年宮城縣師範學校長となり、第一高等學校和漢文學部主任、宮城縣中學校長、東京高等師範學校講師などを經て國語調査委員となる。晩年帝國學士院會員となる。是より先き明治五年文部省に出仕し、英和辭書の編輯に従事し、また言海を編纂す。その後廣日本文典並別記等の著あり。晩年言海の増補に従事し、昭和三年二月死。年八十二。(一四)

地の藩邸に會し微文を草し、土佐藩勤王の先驅をなす。明治元年東征軍の参謀を命ぜられ、後小目付となる。晩年高知城下に閑居し、大正五年十月死。年八十八。(六三、八七)

正親町公董 四、五、七、八、九掲出。(六一)

大越文五郎 一〇掲出。(九八)

大島久直 秋田藩士源治の子。嘉永元年九月生る。文久元年江戸に出で軍事に志し、戊辰の際藩に歸る。後隨軍に出仕し、各種の要職を経て大將となる。日清、日露の役共に功あり。日清役後男爵となり、四十年子爵に陞さる。正二位勳一等。昭和三年九月死。(三〇)

大谷鳴海 二本松藩士。名は信古。元治元年水戸に出征して功あり。戊辰の役、本宮口に西軍と戦ひ、土藩士美正貫一郎を斃し、山地忠七等を傷く。西軍その勇を稱して鬼鳴海といふ。二本松城陥るに及び、西軍を母成嶺に邀へ撃ち遂に會津に入る。戦後朝廷召せども應ぜず。郷の戸長什長等に任じ、明治八年七月死。年四十三。(三九、四一)

大槻磐溪 一〇掲出。(四五、四六、四七)

大槻文彦 磐溪の第二子。父は清復、通稱復三郎、

【力行】

大山格之助 二、三、五、六、一〇掲出。(一五、一七、二五、三一、三二、三五、五九、一〇〇)

大松澤掃部之助 一〇掲出。(三八、四〇、四二)

大山巖 大山彌助に同じ。二、四、五、六、七掲出。(五)

大鳥圭介 七、九掲出。(七)

河野廣中 磐城三春の人。廣可の子。嘉永二年七月生る。初名太吉、のち信次郎、明治三年今の名に改む。少時藩儒川崎紫溪に學ぶ。戊辰の役主として歸



願論を唱へ藩の方向を定む。明治二年若松縣に出仕し、また三春藩に勤仕す。後中村正直の自由之理を讀み、以來民権論を唱へ板垣退助等と共に憲政の發達に努力し、明治十四年自由黨領袖となる。十五年三島通庸の暴政に反抗し、輕禁錮七年に處せられ、二十二年赦されて出獄。三十六年衆議院議長となり、大正三年農商務大臣に任ず。十二年十二月死。年七十五。(八一、八四)

覺王院義親 七、九揭出。(五五、五七)

片岡健吉 二、七、九揭出。(六三、六四)

片倉小十郎 一〇揭出。(三七、三八、五六)

勝安房 一、二、三、五、六、七、八、九揭出。(一五)

勝海舟 勝安房に同じ。(一七)

桂太郎 四、六、一〇揭出。(二四、二五、三〇、三二、三三)

川井小六 秋田藩士。文化十三年生。名は忠誠。俳名撫泉。戊辰の際勳皇前の特選をなす。明治十七年七月死。年六十九。贈正五位。(二七、三一)

河井繼之助 越後長岡藩士。代右衛門辰紀の子。文政十年正月生。名は秋義。蒼龍齋と號す。初め文武の

三年熊本に歸り藩獄に繋かれ、ついで江戸に送られ、四年二月小傳馬町の獄に刑死す。年三十八。(一四) 河村與十郎 二、四、五、六、七揭出。(七八) 菅野權兵衛 會津藩士。名は長修。天保元年生。讀書を好み、武技に長ず。戊辰の役、國老の首班とし、主として討陣に侍し、軍務を處理す。城陷るや藩の罪狀を一身に負ひ、江戸に送られ久留米藩邸に幽せられ、二年五月支藩上總飯野藩主保科氏の邸に自刃す。年四十。(五四)

キ

岸田吟香 美作の人。天保四年四月生。名は銀次。十七歳江戸に出て、林圀書頭の塾に學び、また大阪藤澤東畝に習ふ。元治元年横濱に赴き、ヘボン博士の和英語林集成の編纂に關與す。ついで海外新聞を發行す。慶應三年汽船を輸入し通船商社を設く。四年横濱新聞もしば草發行。明治五年東京日々新聞記者となり、七年探査役に從ふ。十年銀座に樂善堂藥舖を開く。精詩水最も名あり。後日清貿易研究所、東京博文會、河仁會等の創設に功あり。三十八年六月死。年七十三。(四七)

學を藩内に受け、二十七歳にして江戸に出て、齋藤龍堂、古賀謙一郎、佐久間象山、大槻實漢等に學ぶ。安政元年歸國し、以來經術を研究し、開國論を唱ふ。六年再び江戸に出て古賀塾に入り、また西國に遊び、備中松山山田方谷、肥後熊本木下岸濯等を訪ひ、長崎に出で世界の形勢を觀る。文久元年歸藩、以來藩政に盡力し、遂に執政となる。明治元年閏四月上席家老となり、軍事總督を兼ね。七月長岡城戰に傷を負ひ、八月岩代大沼郡鹽澤の舊家に死す。年四十二。(四四)

川上玄齋 熊本藩士。天保五年十一月熊本に生る。名は玄明。小森貞助の子。河上源兵衛の養子となる。夙に文武の學を修め、嘉永二年九月藩の禮除坊主となり、後國老附坊主に進む。文久以來勳皇論を唱へ清川八郎等と交はる。後本職を罷め、藩禁し、文久三年藩選出の親兵となる。以來益々諸方に奔走し、或は七朝に從ひ、或は佐久間象山を斬り、或は長岡に伍し、元治元年禁門の變に加はり、証長の役には諸石の間に戦ひ、藩吏に捕へられ禁獄せらる。後赦され東北に遊説す。維新後固く攘夷論を唱へ、二年歸藩し、鶴崎に居り、長澤大樂源太郎等を灌漑し、

北村長兵衛 土佐藩士。弘化二年生。五平の子。名は重頼。二百石を領す。伏見の役従つて功あり。東征の際砲隊長となる。功を以て中老に進み二百石加賜。明治四年陸軍少佐となり、中佐に進む。征韓論の起るに先立ち、別府管助と共に朝鮮に赴き各地を視察して歸る。十年西南役の際歸つて土佐國內の勳賞を領す。翌十一年三月死。年三十二。(八一、八四)

吉川忠安 秋田藩士。久治の子。通稱頼助。家學を傳へ、文武に通じ、吉川流砲術傳二世の師範となる。藩主に拔でられ、砲術の事を管す。戊辰の際主として勳皇論を唱へ、有志、遊學二隊の士を訓練して頗る功あり。後、軍務局に勤仕し、藩政に與る。晩年殖産興業の道に盡し、併せて著述に從ふ。明治十七年十月死。年六十一。(二六)

木梨精一郎 二、四、七、八揭出。(七九)

木村熊之進 會津藩士。文化十四年生。名は重光。字は中利。蕪湖と號す。藩校日新館に學び、文武の學に通ず。人となり豪宕不羈、弱を援け強を挫く。然れども官は僅かに物頭、頭頭となるに止まる。戊辰の役恭順論を唱へ用ひられず、五月一日白河に戰

木村統太郎 二本松藩士。貫常の子。幼より砲術を習ひ、後江戸に出で江川垣庵に學ぶ。歸りて藩中の子弟を教ふ。戊辰の役少年隊を率ゐ、奮戦して死す。年二十二。(九一、九二)

ク

九條總督 九條道孝と同じ。(二〇、二一、三三、二七、三一、三二)  
九條道孝 三、四、六、七揚出。(二三、二六、一〇〇)

コ

公現法親王 七、八、九、一〇揚出。(四七、四八、四九)  
後藤敬吉 名は敬忠。秋田藩士。江戸に出で西洋砲術、蘭學を習ひ、また水戸に赴き神發流砲術を究め、ついで長崎、鹿兒島に學び、江戸に歸りて江川流の免許皆傳を受く。萬延元年海防隊軍用掛となる。ついで津浦にて武田成章に航海學を習ふ。明治元年藩に在りて砲術を教授す。七月奥羽鎮撫總督の秋田

に來るや討莊先鋒を命ぜられ、仙臺使節を殺害し、ついで有志隊を組織し進軍せんとし、函館出張を命ぜらる。即ち汽船を購入し、海上より莊内領を砲撃す。三年開拓大尉となり、轉じて廳法課に勤仕す。十一年十月死。年五十五。(二六)

【サ行】

カ

西郷頼母 會津藩家老。名は近惠、天保元年生る。幼より學を好む。文久二年藩主守保の京都守護職となるや江戸に至り諫止して用ひられず。戊辰の際恭順の議を建てもまた用ひられず、閉居し、職酬なる時城を出で函館に至り某邸に寓せらる。のち赦にあひ、日光東照宮の祠官となる。明治三十八年死。年七十六。(六、七、一一)  
相馬季胤 相馬因幡守と同じ。(五四、六〇、六一)  
坂英力 一〇揚出。(四、一一、七三)  
酒井忠篤 三、五、六、七、一〇揚出。(三一)  
崎田傳右衛門 二本松藩士。名は良一、後、傳と改む。

自我堂眉雪と號す。代官より郡奉行、郡代、御側用人となり、名奉行の稱あり。維新後少參事となり、權大參事に轉ず。明治四年正月死。年七十四。(八六)

櫻田敬介 一〇揚出。(九三)  
佐竹義堯 一〇揚出。(二六、三〇、三一、三二)  
澤副總督 澤爲量に同じ。七、一〇揚出。(二七、三二、三三、一〇〇)  
三條實美 二、三、四、五、六、七、八、九揚出。(五八)

シ

志賀小太郎 會津藩士。寶藏院流槍術師範與三平の子。父の教を受けその業を嗣ぎ、却つて之に優るの技を有するに至る。顔色黒く痘痕あり甚だ醜し。人呼んで鬼小太郎といふ。天保の末年山口藩に槍術を教へ、三十餘歳にして死す。(四二)

柴田中務 仙臺藩士。戊辰の役大隊長となり、磐城に戦ふ。藩主降伏の後その家人等在番官兵を驚くことあり、その責を負ひ幽閉に處せらる。ついで罪藩主に及ばんことを恐れ、明治元年十一月仙臺に自

歿す。(六七)

ス

須田盛貞 秋田藩士。二千七百石を食む。慶應二年大番頭より進んで小銃隊支配を兼ね。明治元年四月、相件班を以て砲術所總裁たり。澤副總督の秋田領に來るや、主として勸導論を唱へ、是を藩校明徳館に迎ふ。八月家老となり、藩主名代として十二所に出席し、軍事を總裁す。後藩校總裁、世子の傳を繼ぐ。久保田藩大參事、秋田縣典事等となり、五年八月致仕。三十四年八月死。年五十七。(二六)

セ

瀬上主膳 一〇揚出。(六、七、八、三七)  
尺振八 天保十年江戸佐久間町に生る。下總高麗藩醫柏壽の子。初め仁壽と稱す。長じて田邊石庵、藤森天山に學び、尺氏を習す。萬延中中濱萬次郎に英語を學び、西吉十郎に文典を習ふ。ついで横濱にて外人に師事す。文久元年幕府に出仕して外國方通辯となり、遣歐使節に従つて佛蘭西に赴き、三年また米國に渡航す。明治元年兵庫港にありて米國公使

曾通辯となり、三年東京に共立學舎を建て英語を教ふ。五年大蔵省に入り翻譯局長となり、八年辭し、以來家塾に諸生を教授す。十九年十一月海に死す。年四十八。(四七)

世良修藏 二、四、一〇掲出。(一五、五九、一〇〇)

【夕行】

夕

醍醐忠敬 一〇掲出。(二〇、二二、二六、二七、一〇〇)

醍醐參謀 忠敬に同じ。(三三)

竹添進一郎 五、六、七、九、一〇掲出。(一四、一五)

但木土佐 一〇掲出。(四、一八、一九、二二、四三、四五、五六、六〇)

伊達安藝 一〇掲出。(七三)

伊達宗敦 一〇掲出。(五六、五七)

伊達宗城 一、二、三、五、六、七、八、一〇掲出。(五六)

伊達慶邦 一〇掲出。(五七、七〇)

玉虫左大夫 一〇掲出。(一三、四三)

榎井彌五左衛門 二本松藩士。將監と稱す。又克己といふ。六百石を食む。番頭となる。戊辰の役銃士隊長となり、本宮、供中口等に戦ふ。明治二年二月執政となる。三月上京して封土奉還を請ふ。(八四)

千

千葉周作 陸奥氣仙郡氣仙村に生る。北辰無刀流の名士忠左衛門の子。幼字寅松、字は成政。父についで劍術に精しく、江戸神田お玉が池に道場を開き諸生を教へ、北辰一刀流の開祖となる。爲にその名天下に高く、一時水戸藩の擊劍指南番となる。門に及ぶの士頗る多し。安政二年十二月死。年六十三。(七一)

津

津輕越中守 一〇掲出。(七〇)

手

手代木直右衛門 三、四、一〇掲出。(四四)

ト

徳川家宣 二掲出。(四九)

徳川茂承 五掲出。(五一)

徳川慶喜 一、二、三、四、五、六、七、八、九、一〇掲出。(三、一〇、五八)

富田小五郎 一〇掲出。(六七、六八)

豊岡源之進 秋田藩士。名は盛彦。夙に吉川忠安の門に入り、砲隊練習生となる。小野崎通亮等と謀り、

雷風義塾を創始す。藩中勳皇黨の首領なり。戊辰の際驛廻用掛の職に在り。深淵總督の秋田に入るや、數々献策して容れらる。後有志隊を組織し、七月十六日戦て死す。年三十四。(三五)

豊岡盛彦 源之進に同じ。(二六、三三)

【ナ行】

ナ

内藤長壽丸 一〇掲出。(五三、六〇、六六)

長井雅樂 長州藩臣。名は時庸。開國論者なり。藩命を奉じて京都に便し、命を矯めて開國の策を申出大納言に上言す。後捕へられ自刃せしめらる。時に文久三年二月六日。年四十五。(三二)

長岡護美 長岡良之助に同じ。三掲出。(一四)

南摩綱紀 一〇掲出。(九八)

南部利剛 南部美濃守に同じ。四、一〇掲出。(六〇)

丹

丹羽一學 二本松藩士。名は富殿、幼字主税。六百石を食み、千石の禮遇を賜はる。明治元年閏四月番頭より家老に進み白石會議に列す。西軍來りて二本松城に迫るに及び、主として戰論を唱へ、迎撃して克たず。城内武器藏奉行影山藏之進の役宅に自殺す。時に年四十六。(八五、八六、八九、九六)

丹羽新十郎 二本松藩士。名は正名、後、茂正と改む。藩老丹羽石見の子、和左衛門の養子となる。二百五十石を食み、代官、郡奉行、郡代より御側用人となる。戊辰の年勳陣使となり、會津藩に赴く。ついで副使として白石會議に列す。西軍圍城に迫るや主戦

論を唱へ、籠城して自盡す。時に年四十三。(八九、九六)

丹羽丹波

二本松藩家老上座たり。名は富教。三千百六十石を食む。慶應三年正月藩主の上京に従ふ。戊辰の役軍事總裁となり、白河口に戦ふ。二本松城陥るの時、兵を率ゐて會兵と合し石籠口にあり。後米澤に至り、總督府より繁居命ぜらる。二年五月東京徳川茂榮邸に永預けとなる。(一一、三八、七三) 三、八五、九六)

丹羽長富

二本松藩主。幼名蕃吉、覺造、また誠之。文化十年十一月家を承け、左京大夫と稱す。嘉永三年十二月少將に任ず。安政五年十一月致仕。(八六)

丹羽和左衛門

名は弘道、初名保太郎、三百石を食む。郡代、城代より軍事奉行となる。性剛毅質素にして民治殖産に努め、領内植林に成功す。戊辰五月國境熊川を守る。七月西軍來り迫るに及び、歸順論を唱へ、建言するところあれども用ひられず、心に和議を持し、西軍先鋒と會せんとしたれどもまた能はず。二十九日甲冑を著して入城し、床几により、居腹、腸を軍扇の上に割み出して死す。年六十六。(八九、九六)

野津七左衛門

五揚出。(五、七、九) 弟。天保十二年十一月生る。後兄の後を嗣ぐ。維新の役戦功あり。明治五年陸軍に出仕、果進して大將となり、元帥府に列す。日清、日露兩役共に功あり。十七年子爵となり、陞せて遂に侯爵大勳位を授けらる。四十一年十月死。(九一)

【八行】

ハ

服部久左衛門

二本松藩士。名は信定。また保敏、丹羽四郎の子。三百石を食む。戊辰の役醍醐少將附役となる。後小城代に任ず。西軍二本松城に迫るに及び、家人に訣別して城に入り、自殺す。年五十六。(八九、九六)

服部半彌

二本松藩士。名は誠。推松と號す。洞城の子。深く語子百家の學に通ず。明治の初藩廳の

林

大辯となる。後上京して東京新誌を發行し、東京新繁昌記を著す。晩年宮城縣尋常中學校の作文教師となる。明治四十一年八月死。年六十八。(八五)

昌之助

上總西藩主。名は忠崇。忠旭の子。嘉永元年七月生る。慶應三年九月兄忠交の後を嗣ぐ。明治戊辰の役兵を率ゐて西軍を箱根に扼せんとして成らず。後東北、北海道に戦ひ、捕へられて入牢し後赦さる。昭和十五年の頃死。(六一)

ヒ

人見勝太郎

名は寧、舊幕旗下の士。維新の際脱走して相馬中村に至り、會津、仙臺等を経、遂に蝦夷に渡りて榎本武揚の軍に合し、松前奉行となる。(六一、六八)

日野大内藏

二本松藩士。名は和順、竹涯と號す。家老源太左衛門の子。大番職を勤め、二百石を食み、併せて食料八十石を賜はる。戊辰正月藩校教授渡邊新助等の罪を得んとしたるを救解し、事なきを得たり。七月西軍を兩社山に防ぎ、丸に中りて死す。年三十九。(九四)

フ

伏見宮邦家親王

六揚出。(四八) 二川元助 土佐藩士。阪井周五郎の長子。後の阪井重幸なり。弘化三年十一月生る。明治四年陸軍大尉となり、名古屋鎮守司令官より、聯隊長旅團長等となり、中將に進む。四十一年日露役の功により男爵を授けらる。豫備役編入後富士生命の社長となり、また貴族院議員となる。大正十一年三月死。年七十。(八二)

藤村祿平

長州藩士。名は某、戊辰の役奥羽征討軍に加はり、監察兼使番となる。ついで九月參謀補助となさる。(二九)

古莊嘉門

一〇揚出。(一四、一五) ホ

星 尙太郎

仙臺藩士。名は忠狂。天保十一年生る。初め横夷説を唱へ、のち開國論者となり、但木土佐の庇護により横濱に出で兵學を修む。戊辰の際歸藩し、額兵隊を組織す。藩歸順の後同志と共に榎本武揚の軍に投じ、北海に渡る。五稜郭陥るの後、弘前

藩に歸せられ、明治三年三月歿する。ついで開拓使  
權大主典となり、罷めて岩内に居り、製鹽業に従事  
す。九年七月死。年三十七。(四四)

保科正益 三掲出。(七二)

細川越中守 四掲出。(一五)

細川喜廷 六、七、八掲出。(一四)

本多忠紀 本多能登守に同じ。一〇掲出。(五二、  
五三、六〇、六七)

【マ行】

マ

牧野群馬 小笠原唯八と同じ。(六四、七六)

牧野貞明 常陸笠間藩主。貞久の養子。實は布原重  
正の二男。天保元年十一月生る。鋪三郎と稱す。ま  
た貞利、貞直と名のる。嘉永四年四月家を承く。寺  
社奉行、大阪城代等を勤む。明治元年十二月致仕。  
二十年一月死。(五三)

松平越中守 松平定敬に同じ。(三)

松平容保 一、二、三、四、五、六、七、八、九、  
一〇掲出。(一、三)

松平定敬 一、二、三、四、五、六、七、八、一〇  
掲出。(三)

松平宗敦 伊達宗教に同じ。(五六)

松平慶邦 伊達慶邦に同じ。(五三、五六)

前山清一郎 佐賀藩士。名は長定。五兵衛長信の子。  
文政六年二月生る。夙に陽明學を修め、藩學弘道館  
の教授補となり、傍ら家塾を開きて諸生を教ふ。戊  
辰の役奥羽征討軍の參謀となる。功により永世陸四  
百五十石を賜はる。三年佐賀藩權大參事となり、翌  
年兵部省に出仕し、八月歸む。七年佐賀縣内に征韓、  
憂國の二黨起るや中立黨を組織して平定に力め賞せ  
らる。然れども却つて二黨の人士に疎せられ、以來  
兵政を談せず。後一時内務省に出仕したれども、間も  
なく罷め、下總小間子に歸農す。二十九年三月死。  
年七十四。(一七、一八、一九、二〇、二二、二三、  
二八、三二、六九、七〇、一〇〇)

三浦權太夫 二本松藩士。名は義彰、櫻所と號す。藩  
之遺武の子。文久二年五月藩公に従ひ、江戸に派役  
す。然れども執政丹羽丹波の專横を慨し、建言する

ところあり、罪を得、藩國に送還投獄せらる。翌年  
出獄を許され家に置せらる。戊辰の役敗され、農民  
を率ゐて國境杉澤を守り、後退いて供中に備へ、流  
丸に中りて死す。或はいふ自盡すと。年三十二。(九  
三)

宮島誠一郎 米澤藩士。天保九年生る。戊辰の際奥羽  
諸藩聯盟の建白書を持し、京都に赴き、山内春堂に  
より之を朝廷に進達す。明治三年徵されて待詔院に  
出仕し、のち、左院に轉じ、以來修史館御用掛、參  
議官補、宮内省爵位局主事等を勤め、二十九年勅選  
貴族院議員となる。四十四年三月死。年七十四。家  
集に養浩堂詩集あり。(一六)

三好監物 一〇掲出。(一三、六九)

△

牟田口徳太郎 佐賀藩士。名は元學、麿村と號す。利左  
齋門の子。弘化元年十二月生る。戊辰の役藩兵の監軍  
となり奥羽に戦ふ。明治四年工部省に用仕し、十二  
年文部省に轉じ、ついで農商務省に轉じ、山林局長  
となる。十四年大隈重信に従ひ改進黨に加はる。二  
十二年實業界に投じ、東京馬車鐵道會社を整理し、

村田新八 二、三、四掲出。(七)

【ヤ行】

ヤ

安岡覺之助 七掲出。(六四)

山岡榮治 二本松藩士、次郎太夫の子。戊辰の役大  
谷與兵衛隊の大砲方となり、小野新町に出戦し、退  
いて城下大壇口を守る。七月廿九日西軍來迫るに及  
び、同志青山助之丞と敵中に驅け入り奮戦敵數人を  
仆して戦死す。年二十六。(八八)

山縣狂介 二、九掲出。(三二)

山地忠七 二、六、七、九掲出。(八三、八五)

ヨ

吉田松陰 八、一〇掲出。(二七)

吉田大八 一〇掲出。(二四、二五)

人物概覽

米津伊勢守 一〇掲出。〔六〇〕

【ラ行】

リ

龍王院堯忍 七、九掲出。〔五五、五六、五七〕  
輪王寺宮 公現法親王に同じ。七、九掲出。〔五〇、  
五一、五四、五五、五六、五八、一〇〇〕

【ワ行】

ワ

若生文十郎 一〇掲出。〔一三、三一〕  
鷺尾隆聚 四掲出。〔六一〕

(國民史七十二卷) 上製

昭和十九年一月二十日印刷  
昭和十九年一月三十日發行

◎定價金四圓五拾錢  
特別行爲稅相當額五拾錢  
合計 金 五 圓

著 者

德富猪一郎

發行者

東京都神田區錦町一丁目十六番地  
株式會社 明治書院  
取締役社長 森下松衛  
東京都芝區芝浦二丁目三番地  
日進會  
代表者 小松貞藏  
(東京一三三)

印刷所



出版會承認  
い380395號  
700部

發行所

配給元

東京都神田區錦町  
振替東京四九九一番  
電話神田二一四七番  
東京都神田區淡路町  
二丁目九番地

株式會社 明治書院  
日本出版會々員番號一三四五〇五番  
日本出版配給株式會社

384
43

終